

原 著

# 非自発的マイノリティにとっての 「歴史的祖国」に関する一考察 ：ウズベキスタンの朝鮮族を例に

A Consideration of “Historical Homeland” for Involuntary Minorities

: A Case Study of Korean in Uzbekistan

宮崎 理

Osamu MIYAZAKI

保健福祉学部コミュニティ福祉学科

キーワード：非自発的マイノリティ, 歴史的祖国, ウズベキスタン, 朝鮮族  
(Involuntary Minorities, Historical Homeland, Uzbekistan, Korean)

## 抄 録

非自発的マイノリティは、アイデンティティや社会的ネットワークのあり方など、様々な事柄と深く関わる歴史的祖国をどのように位置付けているのであろうか。

本稿では、ウズベキスタンの朝鮮族を事例として、非自発的マイノリティにとっての歴史的祖国の位置付けについて検討することを目的とする。その目的のために、2017年5月、スターリン時代の1937年にロシア極東地域から中央アジアに強制移住させられた朝鮮族の子孫にインタビュー調査を実施した。

調査の結果、次のことが明らかになった。①一家がウズベキスタン社会に同化的に適応する戦略を採用してきた者のケースでは、歴史的祖国とのつながりは、私的な領域や心理的側面に限定されがちである。②一家がエスニック・マイノリティとして生き抜く戦略を採用してきた者のケースでは、ウズベキスタンで困難な社会的現実と直面しているなかにおいて、歴史的祖国は、生存の機会を展望する具体的な場所として位置付けられている。

非自発的マイノリティにとっての歴史的祖国の位置付けは、どのように社会に参入したかという歴史的背景だけでは捉え切れない。世代を重ねるにつれて、移動をめぐる祖先の物語よりも、ホスト社会で採用してきた戦略、直面している社会的現実、さらには歴史的祖国として想定される国の現状などの影響の方が大きくなる。そうした多様な影響を受けながら、人びとは自分なりに歴史的祖国との関係を再構築している。

Historical homeland is related to various things such as form of identity and pattern of social network. What kind of position is historical homeland for involuntary minorities that tend to be in difficult situations in host society?

The purpose of this paper is to examine relation between involuntary minorities and historical homeland. The case in this paper is Korean in Uzbekistan. They are descendants of Koreans who were forced to move to Central Asia from the Russian Far East by Stalin in 1937. Interview surveys with two Koreans in Uzbekistan for this paper were conducted in May 2017.

The results show: (1) in the case which family adopt the strategy that they assimilate in Uzbekistan society, relation with historical homeland are tend to be limited to the private sphere and psychological aspects; (2) in the case which family adopt the survival strategy that they are as ethnic minority, historical homeland is positioned as realistic place to have positive outlook on the chance of survival in the face of difficult social situation.

The main finding of this paper is that relation between involuntary minorities and historical homeland is not be determined only by historical contexts. As time goes by, influence of strategies adopted in host society, current social situations and current conditions of nations that may be regarded as historical homeland become stronger than ancestral stories of migration. People reconstruct their own relation with historical homeland with various influences.

## I. 緒 言

人びとが「国」とどのような関係にあるのかということは、社会的連帯やシティズンシップ、あるいはアイデンティティや帰属意識など様々な事柄と深く関わっている。しかし、ある人が何人<sup>なにじん</sup>なのかということは、単純には言い切れない非常に複雑なものである。その複雑さを生み出している背景の一つに、人びとが国境をはじめとした境界を越えて移動するという現象がある。近年、グローバル化の進行に伴い、人びとは頻繁かつ大量に境界を越えて移動するようになった。しかし、これは現代特有のものではなく、古くから見られる現象である。境界を越えて移動した人びとのなかには、自発的に移動した人びとだけでなく、人身取引や強制移住などによって自らの意に沿わない形で移動せざるを得なかった人びともいる。そうした人びとの代表的な例として、アフリカから奴隷貿易によりアメリカに連れて来られた人びとや、植民地支配を背景に朝鮮半島から日本に連れて来られた人びとなどが挙げられる。

筆者はこれまで、在日朝鮮人に対するインタビュー調査を実施してきた。そのなかで、「国」には複数の意味があるということに気が付いた。例えば、次のようなケースである。ある在日朝鮮人3世の女性は、日本という国家のなかのX県で生まれた。現在、彼女は日本の国籍を取得している。彼女の祖父母は現在の大韓民国に属するY道の出身なので、彼女はそこを自らの故郷として位置付けている。一方、彼女が自分の祖国であると実感しているのは、朝鮮民主主義人民共和国である。

ここでいう「祖国」を表すのには、「歴史的祖国」という言葉が相応しいであろう。「歴史的祖国」とは、「ロシア語でしばしば使われる表現で、民族が発祥した(とみなされている)土地、ないしは民族的同胞が多数を占める国家」を指して用いられる表現である<sup>1)</sup>。人びとは、自分自身が生まれた土地や祖先のルーツ、国籍を有する国家など、様々な次元の「国」に親近感

や帰属意識を抱いたり、現実的な繋がりを持ったりしている。こうした「国」という多義的な概念のなかの一つが、歴史的祖国なのである。歴史的祖国は、他の次元の「国」と同様に(あるいは場合によってはそれ以上に)、人びとのアイデンティティや社会的ネットワークのあり方と強く結び付いている。

ある人が、自らの意思によって移動した者であるか否かの区別は、アメリカ合衆国の文化人類学者であるオグブ(Ogbu, John U.)に倣うならば、「自発的マイノリティ」(voluntary minorities)と「非自発的マイノリティ」(involuntary minorities)という言葉で表すことができる<sup>2)</sup>。歴史的祖国の存在は、非自発的マイノリティにとって、特に重要な意味を持つのではないだろうか。

ウォルマン(Wallman, Sandra)は、ロンドンのインナーシティで暮らす家族を調査し、人びとは、「土地」「労働」「資本」という「構造的資源」(structural resources)と、「時間」「情報」「アイデンティティ」という「編成的資源」(organizing resources)を組み合わせることによって、自分たちの生活を組織化していると指摘している<sup>3)</sup>。これらの資源のいくつかは、シティズンシップによってもたらされるものである。シティズンシップとは、「ある共同社会の完全な成員である人びとに与えられた地位身分」のことである<sup>4)</sup>。元来属していた社会の諸関係から意に反して切り離され、他の社会への参入を余儀なくされた人びとにとって、生活の組織化をめぐるどのような戦略を採用するのか(すなわち、資源にどのようにアクセスしていくのか)は重大な課題となる。ゆえに、非自発的マイノリティにとって、歴史的祖国は、単に郷愁の眼差しを向ける対象としてだけではなく、ホスト社会に変わって種々の資源へのアクセスを可能ならしめる存在として重要な意味を持つことが想定される。

非自発的マイノリティの一つの例として、本稿では、ウズベキスタンの朝鮮族を取り上げる。ウズベキスタンの朝鮮族は、非自発的マイノリティの重要な例の一つである。中央アジアに位置する旧ソ連のウズベキスタンには、スターリン時代の1937年に、ロシア極

東地域から強制移住させられた朝鮮族の子孫が多く暮らしている。

旧ソ連の朝鮮族に関する研究は、それほど多く蓄積されていない。なぜならば、ソ連時代、彼／彼女たちの存在は、マイノリティとして「タブー」と見なされていたからである<sup>5)</sup>。本稿では、ウズベキスタンの朝鮮族を取り上げることによって、旧ソ連に居住する少数民族の人びとが直面する課題に関する諸研究に寄与することを志向したい。また、ウズベキスタンの朝鮮族に関する一次資料は日本にあまり紹介されておらず、資料的にも意義があるだろう。今日、非自発的マイノリティとその子孫の人びとは、日本を含む少なからぬ社会において忘れ去られがちである。さらに、自らの意に反して他の社会に移動せざるを得ない人びとは新たに生じ続けている。このような現状のなか、本稿を通して、彼／彼女たちに対する排除・差別など、社会的解決が求められているアクチュアルな課題を考察するために有用な知見を得たいと考える。

本稿では、ウズベキスタンの朝鮮族を事例として、非自発的マイノリティが歴史的祖国をどのように位置付けているのかを検討することを目的とする。本稿の構成は、以下の通りである。まず、境界を越えた移動に関する先行研究を概観する。つぎに、朝鮮族の強制移住の歴史と、ソ連崩壊後に彼／彼女たちが直面してきた社会的現実を確認する。その上で、2017年5月に筆者がウズベキスタン現地で実施した朝鮮族に対するインタビュー調査の事例を提示し、考察する。最後に、結論として、非自発的マイノリティにとっての歴史的祖国の位置付けと、それがいかなるものに影響を受けているのかについて述べる。

## Ⅱ. 境界を越えた移動

人びとの境界を越えた移動について考察する際、移動がどのような経緯によるものであったのかという歴史的背景は、重要な焦点の一つである。特に、自発的な移動であったのか、それとも非自発的な移動であったのかという点は、参入した社会におけるその後の生存戦略に大きな差異をもたらす。

こうした差異に注目した研究の一つに、オグブによるものがある。オグブは、「マイノリティ・グループは、自発的あるいは非自発的に、様々な社会に組み込まれている」が、「自発的マイノリティは通常、移動することが、更なる経済的な幸福、より良い全体的な機会、より大きな政治的自由をもたらすと信じたた

めに現在の社会に移動した」のであり、「そうした期待は、ドミナント・グループのメンバーや、ドミナント・グループのメンバーによって管理されている諸機関からの扱いに対する認識と、それに対応する方法へ影響を与え続ける」と指摘している<sup>6)</sup>。自発的マイノリティは、「経済的、政治的、社会的な障壁を、多かれ少なかれ一時的な問題として、時間の経過、あるいは必死に働くことやより良い教育を受けることによって克服できる問題であると解釈しているようである」という<sup>7)</sup>。

それとは対照的に、非自発的マイノリティは、「奴隷制、征服、あるいは植民地化によって現在の社会に組み入れられた人びと」であり、「彼／彼女たちは、通常、かつての自由を奪われたことに憤慨し、自分たちに対する社会的、政治的および経済的障壁を、不当な抑圧の一環として認識する」という<sup>8)</sup>。そして、非自発的マイノリティは、「自分たちの状況を一時的なものとしては見ていない。その国における差別を、恒久的かつ固定化されたもの (permanent and institutionalized) であると解釈する傾向がある」と述べている<sup>9)</sup>。

オグブは、移動が自発的であるか否かの歴史的背景の違いが、参入した社会における経済的、社会的、政治的な障壁に対する認識、解釈、それへの対応を左右すると説明しているのである。このような認識の枠組みを、オグブは、「文化モデル」(cultural models)と呼んでいる<sup>10)</sup>。文化モデルの考え方に依るならば、非自発的マイノリティは、参入した社会において困難な状況に置かれがちであり、ポジティブな将来の展望を見出し難いと考えられる。そのような状況の中で生存戦略を模索せねばならないということは、歴史的祖国の位置付けに少なからぬ影響を与えるのではないだろうか。

近年、境界を越えた人びとのアイデンティティやネットワークのあり方は、以前にも増して複雑な様相を呈している。そうした事柄に関する議論においてキーとなるタームの一つが、「ディアスポラ」(diaspora)である。ディアスポラとは、ギリシア語の“speirein”(種をまく)という動詞と、“dia-”(分散する)という接頭語に由来するタームである。もともとはユダヤ人の民族離散を表現するものであったが、今日ではより広い意味で使用されている。

沼野は、ディアスポラの基本的な性格付けに最低限必要な要素として、以下の3つを提示している<sup>11)</sup>。

- ①[移動] 祖国(中心)から周縁(通常二つ以上の様々な場所)への離散。
- ②[起点] 自分たちが帰属すべき祖国に関する集合的記憶の保持。

③[行く先] 移住先での完全な同化の不可能性と疎外。

「故郷」を離れて暮らす人びとを言い表すタームとしては、「亡命者」「難民」「追放者」「移民」などが、ディアスポラ以前から広く使われてきた。沼野は、これらのタームは、「ある場所（祖国、起点）からの追放という側面」を強調するものであり、「越境者にとって圧倒的に重要なのは追放される前の居住地、祖国であって、そこから追われることが大なる厄災として捉えられてきた反面、いったんそこを追われた人間が移住先でどのように新しく多様な生を営むのかに関しては二次的な位置づけしか与えられなかった」と指摘している。それに対して、ディアスポラというタームは、「移住者たちの祖国と過去の厄災を振り返るだけでなく、彼らが『撒き散らされた』先での新たな生の繁栄の可能性も視野に入れるための用語になった」という。ディアスポラというタームは、境界を越えた人びとが「越境の前と後の両方の世界にまたがるように生を営み続けている」ということを視野に入れたものであるという説明である<sup>12)</sup>。

境界を越えた人びとのディアスポラとしてのあり方は、グローバル化の進行に伴い変化を遂げてきている。ディーナー (Diener, Alexander C.) とヘーガン (Hagen, Joshua) は、今日では、送り出し国から受け入れ国という一方向的な移動だけでなく、国家間での循環や帰還、あるいは季節移民などのパターンが珍しくなくなってきていると指摘している。こうした移動パターンの変化は、コミュニケーション技術や移動技術の発展とも相まって、「空間的に散住する集団間での濃密な社会的ネットワーク」の形成を容易にし、「顕著な経済的、文化的、政治的、および社会的変化を伴い、『送先』コミュニティと『受け入れ先』コミュニティとの区別を曖昧にしている」という<sup>13)</sup>。

ディーナーとヘーガンは、移動パターンの変化によって、「伝統的な国民国家システムを超えた集合行為を促進するために組織化される」、「『トランスナショナルな社会フィールド (transnational social fields)』 [移民が出身国と定住国双方の間に多様な社会的関係を維持、もしくは強化しようとする場]」が出現したと論じている。「トランスナショナルな社会フィールド」の出現によって、人びとは、『どちらかの』というよりもむしろ、『両方の』国家への帰属の地位を構成するハイブリッドなアイデンティティを選択することが、珍しくなくなった。また、「トランスナショナルな社会フィールド」としてのディアスポラのコミュニティ

に関連して、「政治的影響力、文化的注入力、および経済的送金が、送先社会および受け入れ先社会の双方に影響を及ぼしてきた」という<sup>14)</sup>。

移動パターンの変化による「トランスナショナルな社会フィールド」の出現が、境界を越えて移動する人びとのアイデンティティや社会的ネットワークのあり方を変化させてきているという説明である。こうした変化は、地理的制約を受けた特定の地域として極めて単純に理解されることが少なくない「コミュニティ」という概念に、再考を投げかけるものでもある。

以上をまとめると、非自発的マイノリティにとっての歴史的祖国を考察する際、移動の歴史的背景は、一つの焦点となる。歴史的背景の違いは、ホスト社会における障壁の認識、解釈の仕方、さらには生存戦略を左右するからである。他方、近年、人びとの移動パターンは複雑化しており、送先コミュニティと受け入れ先コミュニティとの区別が曖昧になってきているという変化も視野に入れる必要がある。

### Ⅲ. ウズベキスタンの朝鮮族

ウズベキスタン共和国は、中央アジアに位置する旧ソ連の共和国である。面積は 44 万 7,400 km<sup>2</sup> と日本の約 1.2 倍である。人口は 3,030 万人である。民族構成は、ウズベク系 (78.4%)、タジク系 (4.8%)、ロシア系 (4.6%)、タタール系 (1.2%) などとなっている。本稿で対象としている朝鮮族は、人口の 1% 以下、約 17 万人が居住していると推定される。国民の 90% 以上がムスリムである<sup>15)</sup>。

ウズベキスタンは、ソビエト社会主義連邦共和国を構成するウズベク・ソビエト社会主義共和国であったが、1991 年のソ連崩壊によって、ウズベキスタン共和国として独立した。独立後も、ウズベク・ソビエト社会主義共和国の大統領であったイスマム・カリモフが、2016 年に死去するまで 25 年に渡って国家元首である大統領の職を務め、行政府が強大な権力を握る独裁的な政治体制が続いてきた<sup>16)</sup>。

ウズベキスタンをはじめとする中央アジア諸国には、多数の朝鮮族が暮らしている。彼／彼女たちは、朝鮮半島からロシア極東地域の沿海州に移動した人びとの子孫である。19 世紀の半ばに、農民たちが朝鮮半島北東部の咸鏡道ハムギョンド（現在の朝鮮民主主義人民共和国の咸鏡北道ハムギョンブクト）から豆満江トウマンガンを渡り、ロシア極東地域へ移動したのが始まりである<sup>17)</sup>。当時、大規模な移動が始まったプッシュ要因としては、「朝鮮が専制体制下に

あり過酷な政治体制がしかかれていたこと、また特に北部で人々が経済的に極めて困難な状況におかれていたこと」が挙げられる<sup>18)</sup>。プル要因としては、ロシア領となったばかりの沿海州の開拓を進めるための入植者をロシア政府が必要としていたことや、駐留し始めたロシア軍人を対象にした商売が成立可能であったことなど、ロシア帝国の極東進出政策に関するものが挙げられる<sup>19)</sup>。

ロシア極東地域への朝鮮族の移動は、大きく4つの時期に分けられる。第1期は、1860年代に朝鮮が飢饉に見舞われた時期、第2期は、1910年の日本による韓国併合に伴うもの、第3期は、1919年の三一独立運動が壊滅させられたことによるもの、第4期は、1922年10月の極東におけるソビエト政権樹立がきっかけとなったものである<sup>20)</sup>。つまり、朝鮮族のロシア極東地域への移動は、移住開始当初のような専制体制の支配や生活困窮からの逃避といった朝鮮内部の事情だけでなく、日本による植民地支配からの逃避や、ソビエトという新しい政治体制への期待など、当時の激動する国際情勢を背景に促されたものなのである。その後、ロシア極東地域に移動する朝鮮族の数は増加の一途をたどり、ソ連で初めて国勢調査が行われた1926年には、16万8千人（地域人口の14%）に達している<sup>21)</sup>。

ロシア極東地域に移動した朝鮮族たちは、1937年、スターリンによって中央アジアへ強制移住させられた。その背景には、1930年代に入って、極東地域の情勢が急速に緊張の度合いを高めていったことが挙げられる。スターリンは、朝鮮人の「国境をまたぐ民族の絆」へ猜疑を抱き、日本人に雇われた朝鮮人スパイが極東地域に潜入を図っているという嫌疑をかけたのである<sup>22)</sup>。1937年8月21日、ソ連人民委員会議長モロトフと全連邦共産党中央委員会書記スターリンは連名で文書を発し、「極東地方への日本のスパイ活動の浸透を阻止するため」に、朝鮮族を中央アジアに強制移住させるよう命じた<sup>23)</sup>。それによって、極東地域の朝鮮族のほぼ全てに当たる17万1,781人（3万6,442世帯）が強制移住させられた。そのうちの7万6,525人（1万6,272世帯）がウズベキスタンに、9万5,256人（2万170世帯）がカザフスタンに移住させられた。強制移住は、貨物列車による約1ヶ月に及ぶ過酷な長旅であり、多数の死者を出すものであった。計画全体としては、1937年10月25日までという極めて短期間のうちに遂行された<sup>24)25)</sup>。

短期間で多数の朝鮮族が送り込まれた中央アジアでは、生活基盤が整っておらず過酷な生活を強いられた

り、混乱の中で一家が離散したりするケースも生じた。強制移住に伴い、当初は民族語学校が中央アジアに移設された。しかし、1938年に「民族語学校改定決定」が出され、朝鮮語の教育機関はすべて閉鎖された。このことの影響は非常に大きく、母語教育が行われないことで、戦後に入ると朝鮮語を話せない朝鮮族の割合が急激に増加した<sup>26)</sup>。

長らく不遇な状況に置かれてきた中央アジアの朝鮮族に大きな転機が訪れたのは、1985年にゴルバチョフによってペレストロイカが推進され始めてからである。内政面の変化としては、自由な言論の活発化によって「歴史の見直し」の機運が高まり、朝鮮族が強制移住の犠牲者として初めて公的に認められたことが挙げられる。1989年には、ソ連で初めて自由選挙で選ばれた人民代議員大会において、強制移住を不法・犯罪として非難する決議が採択された。また、朝鮮族のように小規模で広範囲に散住する民族の自治を保障する施策として、「文化自治」への注目が高まった。

「領域自治に代わりうる民族全体の自治機構」として、全国規模の「文化センター」を設立することが構想され、1990年に「民族発展法」が成立した<sup>27)</sup>。

外交面では、朝鮮半島の南北両国との交流が生まれたことが挙げられる。同じ社会主義陣営であった朝鮮民主主義人民共和国とも、朝鮮族同士の交流はほとんど行われていなかったが、ペレストロイカ以降は交流が生まれた。韓国に対しては、東西対話の機運が高まるなか、ソウル・オリンピックが開催されたことも相まって関心が高まった。1990年にはソ韓の国交が樹立し、社会主義の朝鮮民主主義人民共和国に加えて、もう一つの歴史的祖国として韓国が立ち現れた<sup>28)</sup>。

独立後は、当時経済危機に苦しんでいた朝鮮民主主義人民共和国とは異なり、韓国は活発な対外同胞政策を実施した。その結果、韓国企業がウズベキスタンに進出したり、朝鮮族がウズベキスタンから韓国へ渡航したりするなど、ウズベキスタンと韓国の結びつきは強まった<sup>29)</sup>。

しかし、ソ連崩壊と独立は、ウズベキスタンの朝鮮族にとってネガティブな影響ももたらした。ベク（Back, Tae Hyeon）によれば、現在、旧ソ連の中央アジア各国は、「前近代と現代の社会構造とが混ざり合った状態」にあり、社会的、経済的な困難に見舞われている<sup>30)</sup>。

朝鮮族を取り巻く社会的現実の重要な特徴として挙げられるのが、少数民族に対する差別である。独立後、中央アジア各国では、カザフスタンではカザフ人、

キルギスタンではキルギス人、ウズベキスタンではウズベク人というように、それぞれの共和国の基幹民族 (titular nation) の民族主義が台頭した。現在、基幹民族による公職の独占や、ウズベキスタンではウズベク語というように、基幹民族の言語の使用が増大するなど、社会のあらゆる領域で基幹民族中心主義的な傾向が見られる。ウズベキスタンでは、他の中央アジア諸国よりもそうした傾向は顕著である<sup>31)</sup>。

経済的には、グローバル化が進行するなか国際的な競争にさらされているが、社会主義の残滓と新たに採用された資本主義的な要素が絡み合った状況にある。中央アジア各国は、「独立により、独自の針路を定める機会を得ることができた」が、経済状況は、「自由市場への移行が重視されたために、いっそう悪化した」という<sup>32)</sup>。ウズベキスタンの2016年のGDPは665億ドル、一人当たりでは2,122ドルである<sup>33)</sup>。これは、世界平均の20%に満たない水準である。また、1日2ドル未満で暮らす貧困層は、国民の40%以上を占める1,248万人と推定されている<sup>34)</sup>。「物質的な豊かさは、新たに形成された官僚階層やその他の利権をもつ人びとの手に集中し、貧富の差はひじょうに拡大している」のである<sup>35)</sup>。

このように、ウズベキスタンの朝鮮族を取り巻く状況は、ソ連崩壊後に大きな変化を遂げてきた。強制移住の歴史的経緯のみならず、旧社会主義国に特有の事情や、グローバル化の進行といった現代的な特徴によってもたらされているものも合わせて押さえる必要がある。

#### IV. インタビュー調査

2017年5月、ウズベキスタン共和国の首都圏と地方都市で、朝鮮族に対するインタビュー調査を実施した。本研究では、筆者がウズベキスタンの朝鮮族に関する諸研究を開始するにあたっての探索的調査として、彼/彼女たちとのコネクションがある人物に依頼し、調査に応じられる2名の紹介を得た。個人が特定されることを防ぐために、調査対象者選定の過程・方法等に関する詳細な記述は控える。調査への協力に関しては、得られた情報は学術的な目的のみに用いることで同意を得た。

調査は、事前に作成したインタビューガイドを手がかりに、半構造化インタビューを実施した。インタビューガイドでは、「調査対象者のルーツについて」「ウズベキスタンの朝鮮族社会について」「調査対象者

自身について」の3つの大項目を挙げ、それぞれ具体的な質問を準備した。実際のインタビューの場面では、準備した質問を投げかける前に調査対象者が応答にあたる内容を語るが多かった。Aさんには、日本語で直接インタビューを実施した。Bさんには、筆者が日本語を話し、Bさんの友人たちとの間で日本語/ウズベク語の通訳者をはさみ、彼/彼女たちがBさんとの間でウズベク語/ロシア語の通訳をするという形でインタビューを実施した。

以下は、インタビュー調査での語りをノートに記録し、それを元に整理・編集したものの一部である。インタビューのなかで直接発話した言葉は、カギ括弧をつけて表す。倫理的配慮として、個人が特定されないように匿名化して記述する。このデータを基にナラティブ分析の一つであるホリスティック分析を行い、明らかになったことを「V. 考察」で述べる。ホリスティック分析は、インタビューで得られたデータをコード化せずに、全体像を見ながら物語のテーマを探るアプローチである<sup>36)</sup>。

##### (1) 首都圏在住者の事例：Aさん

Aさん(調査当時60歳)は、ウズベキスタンの首都圏に居住し、語学教師を務める女性である。彼女は、インタビューに際して、資料館で調べた朝鮮族の強制移住に関する資料や親戚から借りた文献、自身が所有する祖先の写真などを多数持参した。それらを筆者に見せながら、個人的なことだけでなく、朝鮮族の強制移住の経緯なども含めて時間をかけて熱心に語った。

ウズベキスタンの首都タシケントは、人口200万人を誇る中央アジア最大の都市である。中央アジアで唯一地下鉄が通っており、高層ビルやまばゆいネオンサインなどが目立つ近代的に整備された街並みが見られる。タシケントのこうした様子は、ウズベキスタンの中では特別なものである。首都に居住するには許可が必要であり、誰でも住めるというわけではない。首都圏で暮らすAさんの社会階層は、比較的高い部類に属すると思われる。

Aさんが自分で調べた文献には、1857年に、最初の朝鮮族がロシアに渡ったという記述が残されている。それによると、当時、ロシア極東地域に居住していたのは、ロシア支配以前からそこにいた先住民がほとんどで、人口は少なかった。当地を守るためにロシア軍が派遣されており、その軍隊に家畜を売るために朝鮮族が豆満江を渡って朝鮮半島とウラジオストクを行き来していた。但し、この頃はまだ朝鮮族はロシア極東

地域に定住していなかった。朝鮮族がロシア極東地域へ移住し始めたのは、1863年以降である。この移住者の中に、Aさんの曾祖父母たちも含まれていた。朝鮮半島で、「朝鮮の貴族の下で働くのは大変だったために、より良い生活のために、ロシアと朝鮮を行き来する中で移住した」という。Aさんの祖父母は共にロシア極東地域で生まれ、父母もそれぞれロシア極東地域の異なる町で生まれた。

1937年に、Aさんの父も母も、最初はカザフスタンに強制移住させられた。当初は自由な移住は許されていなかったが、1953年のスターリンの死後、朝鮮族は、「土地が良くないカザフスタン」から少しずつウズベキスタンへ移住していった。そうした移住者の中に、Aさんの父母も含まれていた。Aさんの父は、「酒を飲むといつも泣いた」という。二十代で強制移住させられたAさんの父にとって、「故郷に帰ることが夢」であったが、果たせぬままソ連崩壊以前に亡くなった。Aさんの父は、Aさんに対して強制移住の経験について話すことはほとんどなかった。Aさんは「自分のルーツについて興味を持って」、自ら調べた。Aさんの父は、農業を兼業しながらシュコーラ<sup>37)</sup>の校長を務めていた。母は、結婚後数年間は主婦だったが、その後、会計士として働いた。

朝鮮族の歴史は、「本当にパラドクスですよ」とAさんは語る。「最初は朝鮮の貴族から逃げた。でも次に日本に支配され、それから逃げた。しかし、ロシアでも支配され強制移住させられた」からだという。

ウズベキスタンに強制移住させられた多くの朝鮮族が、ソ連国籍を得るためにロシア正教に改宗したという。子どもに聖人の名前を付け、ロシア風の名前にする人びとも多数いた。Aさんの苗字は朝鮮風のものであるが、名前はキリスト教に由来するロシア風の名前である。ソ連は多民族国家であったが、朝鮮族は、「ロシア文化を受け入れて、社会的地位を得た」と語る。

Aさんはロシアの大学で学んだ後、語学教師になった。夫もロシアの大学で学び、研究者になった。夫の兄弟やAさんの義理の兄弟など、親族には大学教員が多く、ロシアの大学で教鞭を執っていたり、北米の大学を卒業したりした親族もいる。Aさんの息子のうちひとりとは留学先の日本で会社を営んでおり、韓国人の女性と結婚した。もうひとりの息子は、日本の大学院に通っている。首都圏で暮らしている娘もおり、その夫は独立後にウズベキスタンに来た韓国人である。

1991年にウズベキスタンはソ連から独立したが、「独立後に習慣が変わった」という。独立後に様々な

民族がそれぞれの「文化センター」を作った。イスラームの新春3月21日には、民族ごとに「文化センター」や公園で祝うようになった。Aさんが「文化センター」のメンバーになったのは、2017年3月である。国際女性デーのパーティに誘われたのがきっかけで、夫と共に参加した。メンバーは70～80代の人ほとんどで、「60代の自分が一番若い」という。「年配の人が友人を作る場」でもある。学校で朝鮮語を教えている人や、アーティストなどがおり、朝鮮語を教えたり文化活動をしたりしている。「文化センター」以外に朝鮮族が集まる場として、韓国や米国などから来た宣教師が開いたプロテスタントの教会に通う人たちもいる。

Aさん自身の日常生活習慣にも、変化があった。普段は「ロシア式的生活」をしているが、ウズベキスタンの独立後は、還暦や1歳の祝いの際の「イベントのときだけ」だがチョゴリを着たり、「個人のイベント」として「お盆のようなもの」を行ったりするようになった。

食事については、「歳をとるにつれて朝鮮料理が好きになった」ので、「1日に1回は朝鮮料理を食べないと落ち着かない」という。Aさんが子どもの頃、家庭で母はロシア料理を作り、祖母は朝鮮料理を作った。祖母には「キムチも作らされた」という。Aさんは、毎年10月になると、安いうちにその年の新米を200キロほどまとめて購入する。首都圏には、「コリアン・ストア」があり、朝鮮料理に必要な食材は、そこで購入している。

独立当初は、「文化センター」には朝鮮民主主義人民共和国とつながりのある人たちのグループが存在し、交流が盛んに行われていた。メンバーの中には、金日成に会ったことがある人もいた。しかし、現在は、交流が行われているということを見聞きすることはない。

韓国からウズベキスタンにビジネスで来る人がいたり、逆に、ウズベキスタンから韓国に出稼ぎで行ったりする人も多い。それは、「朝鮮族のためのビザ」があり、「気軽に韓国に行ける」からだという。ウズベキスタンにおいて、公的年金だけで老後の暮らしを賄うことは難しいので、退職後に韓国に渡る人もいる。Aさんの知人も一家で渡韓したが、「ビジネスが上手くいかず」、「半年後に帰ってきた」という。ビジネスを始めて儲けようとして渡韓する朝鮮族は少なくないが、「うまくいくはずがないこと」であり、「まったく現実的ではないこと」である。Aさんは、「なぜ韓国に行かないのか」と人から言われることもあるけど、私は旅行以外では行かない、そして、「だって私の故郷は

ウズベキスタンですもの」と何度も強く語る。

## (2) 地方都市在住者の事例：Bさん

Bさんは、ウズベキスタンの地方都市で生まれ育った18歳の男性である。調査当時、職業専門学校に通う学生(当時3年生)であった。インタビューに際して、Bさんの友人(朝鮮族以外の民族2名)も同席した。

Bさんが住んでいるのは、首都タシケントから遠く離れた州の州都である。大通りを外れると舗装が不十分な道路があったり、電気や水道の使用に制限があったりするなど、近代的な首都圏とは全く趣の異なる農業が中心の地方の町である。

Bさんの「四世代よりも前の祖先」が、朝鮮半島北部からウラジオストクに移住し、曾祖父母がウズベキスタンに強制移住させられた。最初はBさんが住んでいる州の他の町に到着し、その後、曾祖父母自ら現在の町に移住した。Bさんは、こうした祖先の物語について、祖父から聞かされている。

インタビューに同席したBさんの友人は、朝鮮族の強制移住について、おぼろげながら親や学校の授業で聞いたことがあり、「皆がなんとなく知っていること」と話すと話す。しかし、Bさんの祖先が朝鮮半島北部の出身であるということは、このインタビューを通して初めて聞いた話である。友人たちは「てっきり韓国の出身かと思っていた」と笑顔で口々に話し、とても驚いた様子である。

Bさん一家だけでなく、親族の多くも同じ町に住んでいる。親族はBさんの曾祖父母がこの町に来た時に一緒に来たわけではなく、「徐々に集まってきた」という。Bさんが住んでいる町には、朝鮮族の友人も多くいる。この町の朝鮮族の多くは、朝鮮族同士で結婚する。旧正月には、朝鮮族が集まり共に祝う。

普段の生活の中では、キンパ、ピビンバ、ククシ、キムチ、シレギなどの朝鮮料理を日常的に食べる習慣がある。その他にも、「チャムリ」などと呼ばれるウズベキスタンに土着化して発展したと思われる独自の朝鮮料理も食す。祭祀<sup>チエサ</sup><sup>38)</sup>が継承されており、Bさんの家では1年に1回、4月に執り行われている。誕生日や祭祀の際には、特に盛大に朝鮮料理を食べる。

Bさんの父は、2～3年前から韓国で働いている。父の兄が先に出稼ぎに行き、その後に呼び寄せられた。韓国には他に親戚など頼れる人がいるわけではない。朝鮮族は、韓国での就労ビザが取得しやすく、Bさんの周囲の朝鮮人の「多くが韓国に行く」という。Bさん自身も、いずれは韓国に行くつもりである。Bさ

んは、「韓国で働く」と語る。韓国に行ったら、「いろいろなものを観てまわりたい」「勉強したい」という。韓国に行きたい理由を詳しく尋ねると、「何かしたいことがあるからというわけではない」、「祖国だからだ」と当然のように言い切る。「やりたいことがあるわけではない」が、「父が見つけてくれる」という。朝鮮半島の北部にルーツがあるBさんにとって、「朝鮮民主主義人民共和国を祖国だとは思わないのか」と尋ねると、「祖国だとは思わない」、「まったく違う国だから」と答える。

将来韓国に行くことに備え、現在、Bさんは朝鮮語を習っている最中である。教えてくれるのは、「韓国で働いていたことがある、母の友人」である。Bさんの家庭では、単語など日常的に朝鮮語を使うことがある。しかし、現在韓国で使われている言葉と、「家族の中で受け継がれている言葉は違う」という。

## V. 考 察

一口にウズベキスタンの朝鮮族といっても、歴史的祖国の位置付けは、AさんとBさんでは対照的である。Aさんが語ったのは、故郷に郷愁を抱きながらも、旧ソ連時代に主流社会へ適応し、首都圏で社会的地位を獲得してきたAさん一家の物語である。Aさんは、自身が強制移住させられた朝鮮族の子孫であるということに自覚的である。父があまり語りたがらなかった強制移住の歴史について関心を持って積極的に調べ、それを自分につながる物語として語っている。しかし、歴史的祖国とのつながりは、食生活の一部や年に数回の文化的行事、子どもたちの韓国人配偶者の存在など、私的な領域や心理的な側面に限られている。独立後に朝鮮族の習慣が変化したと語ってはいたものの、Aさん自身が「文化センター」のメンバーになったのは、設立から25年以上も経過してからである。

Aさん一家は(Aさん自身も半生において)、朝鮮半島とのつながりを持つことを想像すらできなかった旧ソ連時代を生きて来た。そのような社会環境のなかで、ウズベキスタン社会に同化的になることによって生活を組織化するという戦略を選択してきた。その戦略によって、首都圏での高い社会的階層を獲得してきたものと考えられる。そのようなAさんにとって、生き抜くための資源をウズベキスタン社会の「外部」に求める必要はない。ゆえに、Aさんにとって韓国は歴史的祖国であり一定程度は現実的なつながりがあるながらも、「私の故郷はウズベキスタン」と言い切り、



今後も首都圏で生活していくことを展望しているのである。

Bさんも韓国を歴史的祖国として位置付けている。しかし、その位置付けはAさんとは大きく異なる。Bさんが語ったのは、エスニック・マイノリティとしての朝鮮族同士のつながりを維持しながら、地方都市で生きてきたBさん一家の物語である。そして、その物語は、歴史的祖国としての韓国に将来を展望する自身の物語につながっている。韓国への労働者としての渡航は、Bさんにとって現実的な選択肢となっている。その背景の一つには、ウズベキスタンにおいて朝鮮族が直面している社会的現実がある。それは、基幹民族であるウズベク人が優遇されるなかで、少数民族である朝鮮族が社会の周縁に置かれているということや、経済的な困難にさらされているということである。

ウズベキスタンの首都圏と地方都市を比較すると、社会的・経済的環境の差異は顕著である。ウズベキスタンでは独立後の経済的混乱のなかで首都圏と地方の農村部との格差が拡大し、人口多数の「新しい貧民」と呼ばれる貧困層と、ごく少数の「新しいウズベク人」と呼ばれる富裕層が形成された<sup>39)</sup>。経済格差は非常に大きく、2016年の公式な年間所得平均は、ウズベキスタン全国で4,311.9千スムなのに対して、タシケントは10,251.3千スムと2倍以上の開きがある(実際には、公式の値よりも所得は少なく、格差はより大きい可能性がある)<sup>40)</sup>。体制転換は、ガス、電気、水の不十分な供給、医療や教育の質の低下とコストの増大、仕事の減少と失業率の増加、賃金の不払い、賄賂の横行、インフレなど、生活のあらゆる領域に問題をもたらした<sup>41)</sup>。これらの問題は、いまだ解決されていないものが多い。首都圏での生活基盤と社会的地位を築いてきたAさんとは異なり、地方で生活するBさん一家は、こうした社会的現実によるネガティブな影響を強く受けているのであろう。

Bさんが韓国への渡航を現実的に展望するもう一つの背景として、韓国の移民労働者受け入れ政策が挙げられる。2007年、韓国政府は「外国人勤労者の雇用等に関する法律」を一部改正し、中華人民共和国国籍および旧ソ連地域の国籍を有する朝鮮族に、韓国内での自由な就業を認めるようになった<sup>42)</sup>。韓国へ渡航し働くことが、現実的に展望できる状況が生まれたのである。これは、「トランスナショナルな社会フィールド」の出現であり、送出先コミュニティと受け入れ先コミュニティとの区別が曖昧になってきているという変化である。Bさんは、朝鮮民主主義人民共和国は

「まったく違う国」と語るが、政治体制の違いよりも、こうした政策的な背景の方が大きいのではないだろうか。Bさんにとって、「祖国だから」という理由で将来渡航することを展望する韓国は、単に祖先のルーツである朝鮮半島に現存する一つの国家というだけでなく、現実的な生存の機会を展望する具体的な場所なのである。

このように、2人の朝鮮族の歴史的祖国に対する位置付けの違いの背景には、一家が採用してきた戦略の違いやそれに規定された現在の状況、直面している社会的現実などといった複数の事柄が織物のように織り重なっている。そして、将来どのような展望を描くのかということとも関わりながら、それぞれなりの歴史的祖国との関係が再構築されているのである。

## VI. 結 語

本稿では、非自発的マイノリティが歴史的祖国をどのように位置付けているのか検討することを目的とし、事例の一つとしてウズベキスタンの朝鮮族を取り上げ論じてきた。

オグブが提示した「文化モデル」の考え方を援用するならば、非自発的マイノリティは、ホスト社会においてポジティブな展望を見出すことが難しく、「外側」の社会としての歴史的祖国とのつながりが強くなることが想定される。しかし、本稿で実施したインタビュー調査の結果から見てきたのは、非自発的マイノリティにとっての歴史的祖国の位置付けは、文化モデルだけでは捉え切れないということである。世代を重ねるに従って、移動の歴史的背景(すなわち、ホスト社会にどのような経緯で参入したのかという祖先の物語)よりも、移動後の社会において生活を組織化するためにどのような戦略を採ってきたのか、そして、現在どのような社会的現実と直面しているのか、さらには歴史的祖国として位置付けられる可能性のある国家の政策や体制など、様々な事柄からの影響の方が強くなるということが明らかになった。

生まれ育った国家においてポジティブな展望を見出し難い場合には、歴史的祖国は生存の機会を模索する現実的な場所となる。「トランスナショナルな社会フィールド」の出現によって、歴史的祖国との行き来が以前よりも容易になっているからである。このことは、排除/包摂をめぐる議論が、もはや一国の枠組みでは収まり切らないことを示している。

最後に、非自発的マイノリティに対する排除・差別

全般に関して得られた知見について述べておきたい。それは、非自発的マイノリティと歴史的祖国とのつながりは、主流社会とのネガティブな差異ではないということである。社会的排除研究では、排除は排除されている人びとの主流社会への不適応として論じられがちであることが問題化されてきた<sup>43)</sup>。本稿で明らかになったように、歴史的祖国の位置付けは、祖先が生きてきた歴史や直面している社会的現実など、個人の力ではいかんともしがたいことと関わっている。それらの多様で複雑な影響を受けながら、将来の展望とも関わりつつ、人びとは自分たちなりに歴史的祖国との関係を再構築している。このことは、人びとと歴史的祖国との関係を考える際、社会の歴史と現代的特徴を踏まえて考察する必要があることを示唆している。

なお、本稿では、筆者の言語的制約からロシア語や朝鮮語、ウズベク語などで書かれた先行研究を十分に検討することができなかつたり、インタビューに際して通訳をはさんだりした。また、調査対象者の数も限定的である。今後、これらの課題を可能な限り克服し、ウズベキスタンの朝鮮族にとっての歴史的祖国の位置付けについてより精緻な検討を進めたい。さらに、非自発的マイノリティ全般のホスト社会での戦略について、歴史的祖国の位置付けだけでなく、総合的に明らかにすることを今後の研究課題としたい。

## 注釈および引用文献

- 1) 半谷史郎・岡奈津子：『中央アジアの朝鮮人—父祖の地を遠く離れて』、4頁、東洋書店、2006。
- 2) Ogbu, J. U.: 'Variability in Minority Responses to Schooling', George and Louise Spindler eds., "Interpretive Ethnography of Education", pp.255-278, LEA, 1987.
- 3) Wallman, Sandra: "Eight London Households", Tavistock, 1984. (=福井正子訳：『家庭の三つの資源：時間・情報・アイデンティティ』、33-63頁、河出書房新社。)
- 4) Marshall, T. H. and Bottomore, Tom.: "Citizenship and Social Class", Pluto Press, 1992. (=岩崎信彦・中村健吾訳：『シテizenshipと社会的階級—近・現代を総括するマニフェスト』、37頁、法律文化社、1993。)
- 5) Kim, German N. and King, Ross.: 'Koryo Saram: Koreans in the Former USSR', "Korean and Koreans American Studies Bulletin", Vol.2: No.2&3, East Rock Institute: New Haven, 2001. (=柏崎千佳子訳：「コロヨサラム—旧ソビエト連邦のコリアン」、高全恵星監修：『ディアスポラとしてのコリアン—北米・東アジア・中央アジア』、373頁、新幹社、2007。)
- 6) Ogbu, J. U.: 'Immigrant and Involuntary Minorities in Comparative Perspective', Gibson, M. and Ogbu, J. U. eds., "Minority Status and Schooling", pp.6-9, Garland Publishing, 1991.
- 7) *ibid.*, pp.10-11.

- 8) *ibid.*, p.9.
- 9) *ibid.*, p.14.
- 10) *id.*: 'Cultural Models, Identity and Literacy', "Cultural Psychology", pp.520-540, Cambridge Univ. Press, 1990.
- 11) 沼野充義：「総論 ディアスポラ論」、塩川伸明・小松久男・沼野充義編：『ユーラシア世界2 ディアスポラ論』、2-3頁、東京大学出版会、2012。
- 12) 同上、4-6頁。
- 13) Diener, Alexander C. and Hagen, Joshua.: "Bordera: A very short introduction", Oxford University Press, 2012. (=川久保文紀訳：『境界から世界を見る—ボーダースタディーズ入門』、118-119頁、岩波書店、2015。)
- 14) 同上、119-120頁。
- 15) 外務省、ウズベキスタン共和国 (<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/uzbekistan/data.html>), 2017年9月29日閲覧。
- 16) カリモフの死後、2016年12月の大統領選挙で後継者としてシャヴカト・ミルズィヤエフが当選した。ミルズィヤエフはカリモフと近い関係であり、大統領交代もウズベキスタンの政治体制にそれほど大きな変化は起きていない(2017年9月現在)。
- 17) 半谷史郎・岡奈津子：前掲、8頁。
- 18) Kuzin, Anatolij Timofeevich.: "Daljnevostochnye Korejtsy: Zhiznj i Tragedija Sudjby", Daljnevostochnoe knizhnoe izdatelstvo: Yuzhno-Sakhalinsk, 1993. (=岡奈津子・田中水絵訳：『沿海州・サハリン 遠い昔の話—翻弄された朝鮮人の歴史』、22頁、凱風社、1998。)
- 19) 半谷史郎・岡奈津子：前掲、8頁。
- 20) Kuzin, Anatolij Timofeevich.: *op.cit.*, (=前掲、25頁)。
- 21) 半谷史郎・岡奈津子：前掲、20頁。
- 22) 同上、28-30頁。
- 23) ソ連人民委員会議・全連邦共産党中央委員会決定第1418-326号極秘、1937。
- 24) 半谷史郎・岡奈津子：前掲、35-36頁。
- 25) Kuzin, Anatolij Timofeevich.: *op.cit.*, (=前掲、161頁)。
- 26) 同上、36頁。
- 27) 同上、45頁。
- 28) 同上、47頁。
- 29) 同上、56-57頁。
- 30) Back, Tae Hyeon.: 'The Social Reality Faced by Ethnic Koreans in Central Asia', "Korean and Korean American Studies Bulletin", Vol.2: No.2&3, East Rock Institute: New Haven, 2001. (=柏崎千佳子訳：「中央アジアのコリアンが直面する社会的現実」、高全恵星監修：『ディアスポラとしてのコリアン—北米・東アジア・中央アジア』、430頁、新幹社、2007。)
- 31) *ibid.*, (=435頁)。
- 32) *ibid.*, (=431頁)。
- 33) IMF: "World Economic Outlook", 2017.
- 34) Asian Development Bank: "Poverty in Asia and the Pacific", 2011.
- 35) Back, Tae Hyeon.: *op.cit.*, (=431-432頁)。
- 36) Emden, C.: 'Conducting a narrative analysis', "Collegian", Vol.5: No.3, pp.34-39, Australian College of Nursing, 1998.
- 37) 旧ソ連の初等・中等教育機関。日本のように小学校・中学校・高等学校の区別はなく、11年制の一貫教育であった。
- 38) 儒教式の祖霊崇拜の伝統儀式。日本における仏式の法要がそれに近い。

- 39) 和崎聖日:「ポスト・ソヴィエト時代のウズベキスタンの『乞食』:都市下位文化におけるイスラームと共同性」,『文化人類学』, Vol.71 : No.4, 461 頁, 2007.
- 40) The state committee of the Republic of Uzbekistan on statistics, Analysis of the development of living standards and welfare of the population in the Republic of Uzbekistan (<https://stat.uz/en/435-analiticheskie-materialy-en1/2078-analysis-of-the-development-of-living-standards-and-welfare-of-the-population-in-the-republic-of-uzbekistan>, 2017 年 9 月 29 日閲覧).
- 41) World Bank:“*Consultations with the Poor: Uzbekistan*”, pp.6-8, 1999.
- 42) 鄭雅英:「韓国の外同胞移住労働者—中国朝鮮族労働者の受け入れ過程と現状分析」,『立命館国際地域研究』, 第 26 号, 77 頁, 2008.
- 43) 宮崎理:「ヨーロッパにおける社会的排除概念—ポストコロナルな議論との関係において」,『北星学園大学大学院論集』, 第 5 号 (通巻第 17 号), 45 頁, 2014.